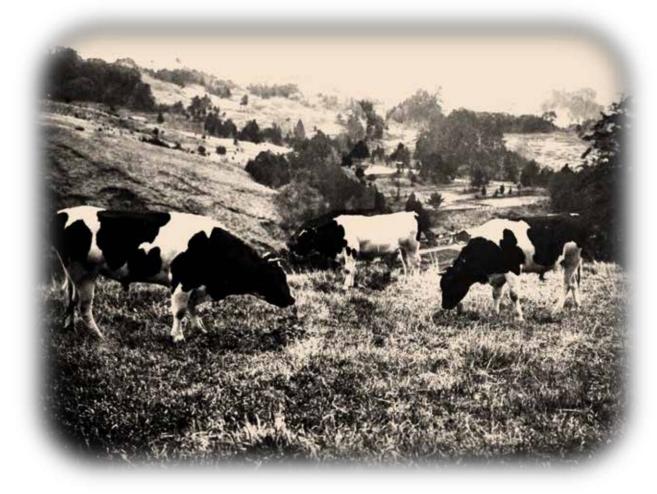
# 千葉県酪農のさと **貧岡牧講演会** 2017年度 第1回

# 食べて元気に!の起点:嶺周牧



2017年 6月24日 (土) 13:30~15:30 千葉県酪農のさと視聴覚室

講演1 「嶺岡牧の魅力」 日暮 晃一

講演2 「乳酪の郷を訪ねる」 佐藤 奨平

# ミニ企画展「嶺岡牧の牛馬を守る―鉄炮の貸与による被害獣の駆除―」

会場:第3展示室 牧士の任命に伴う牧士鉄炮の貸与に関する古文書を展示(石井家文書)

パネル展「遺構から嶺岡牧を読み解く―原動力生産の牧から産業の牧へ―」

会場:多目的スペース 江戸幕府直轄牧で唯一全貌が残る嶺岡牧の姿を写真で見る

# 嶺岡牧の魅力

# 日 暮 晃 一

# わくわくどきどき過ごして

#### I. 嶺岡牧再発見

陽光が照り輝く海に張り出した、照葉樹林特有の深緑に包まれた嶺岡山に分け入ると、万里の長城のように延々と伸びている石塁に突き当たり、アンコールの遺跡を発見した時の感激を想起させられる。これが、前近代社会の原動力生産基地であり日本食生活近代化遺産でもある、嶺岡牧の遺構である。

福岡牧は『延喜式』に記された官牧に遡り、正木・里見の牧、江戸幕府直轄牧、地域畜産会社の牧と明治期まで続いたが、安房酪農の枯凋とともに地元でも知る人は僅かとなった。嶺岡牧への科学的研究も、遺構・文献・聞き取り調査で安房酪農史に迫った金木(1961)、幅広い史料調査で乳製品史として嶺岡牧を研究した渡辺(1969)、古文書調査から牧士の社会的位置づけに迫った大谷(1993)などが僅かに有るに過ぎない。想像に想像を重ねた捏造された嶺岡牧像が喧伝され、嶺岡牧の規模など基礎的なことさえ分からず、嶺岡牧再生

を梃子とする地域再生の桎梏となっていた。

そこで、2009年に、嶺岡牧の実態を明らかにすることを目的にトランスディシプリナリーな嶺岡牧調査研究を開始した。これにより、嶺岡牧及び製乳業跡やチッコカタメターノ食など嶺岡牧文化に関わる実態に迫ってきた。その結果は随時報告してきたが(日暮 2012、日暮・千葉 2013、日暮ほか 2015 など)、嶺岡牧再生の資源化は不十分であった。そこでここでは、これまでの調査研究の成果を、地域再生を行う上での魅力面から再整理し、資源化の基礎整備を進めることとしたい。

# Ⅱ. 嶺岡牧の魅力

#### 1. 懐かしくて美しい景観

嶺岡牧の景観は以下の魅力を有している。

- 1)海が見える江戸幕府直轄牧 (図1)。
- 2)開放感を感じる景観 (図2)。
- 3)日本の原風景が続く懐かしい景観。



図 1 海から 10km離れた嶺岡西二牧から嶺岡山塊と清澄山系に挟まれた長狭平野越しに南房の海を望む



図 2 鴨川湾越しに嶺岡牧と騎馬兵団の長である源頼朝再起の地である二右衛門島を望む

- 4)千葉で渓谷美を楽しめる景観。
- 5)動植物など良好な自然美に出会える。

#### 2. 全貌が望める唯一の江戸幕府直轄牧

首都圏にありながら、嶺岡牧は保存状態が 良く全貌が望める。その魅力は以下の通り。

- 1)外周約75kmと大規模な牧を,延々と続く野馬土手などで体感できる(図3)。
- 2)木戸、牛馬の水呑井、仮囲、小屋跡など 小金牧・佐倉牧では殆ど確認できない遺構を 見られ、牧をイメージできる(図4・5)。
- 3)遺構が良好に保存されており嶺岡牧の構造及び管理方式を捉えられる(図 6 )。
  - 4)石切丁場があり礫を遺構に使用 (図7)。
  - 5)牧士住宅・墓地など関連遺構が残る。



図 4 城の虎口に似た構造を持つ北風原の大木戸跡



図 5 丘頂に湧水を堰き止めて構築した牛馬の水呑井



図 3 現在 40 km確認している嶺岡牧の外周を廻る野馬土手

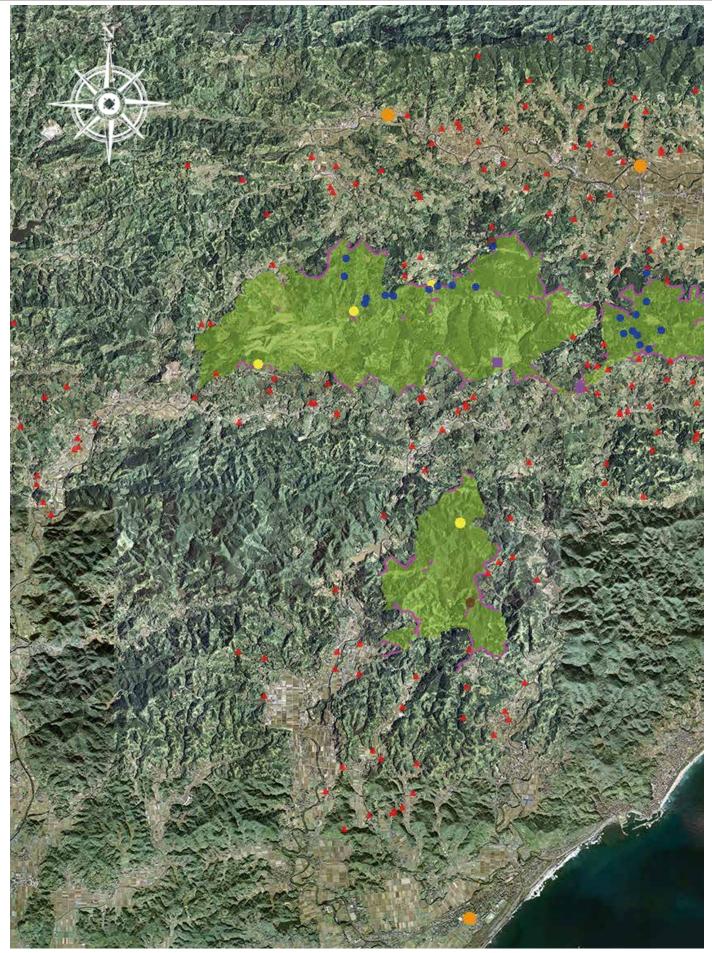


図 6 稠密に分布する良好に残され現地で見られる嶺岡牧に関わる遺構・史跡の分布





図 7 嶺岡西二牧に残る石切丁場の採石坑

## 3. 多くの記録・民具が残る

嶺岡牧に関わる古文書や近代文書が、牧士 や嶺岡牧社・嶺岡畜産会社の役員を中心に、 約3万点と多数残されており、嶺岡牧経営に ついて遺構と一体で知ることができる(図8)。 また、明治時代まで牧経営が続いたことから、 馬捕の写真など他の江戸幕府直轄牧では得ら れない史料が残っている。

嶺岡牧を伝える遺物として、馬具などの民 具が多く残されており、嶺岡牧で行われてい た「こと」を時代劇のように復元することが できる(図9)。

嶺岡牧に関わる歴史・民俗資料として,馬 頭観音・牛頭観音が嶺岡牧周辺地域で約 500 体と多数遺存している (図 6・図 10)



図 8 白牛酪製造のため白牛母子を江戸に送る古文書

#### 4. 嶺岡牧文化を楽しむ

嶺岡牧文化を示す行事として、代の牛洗神事(図 11)や流鏑馬等が残されている(図 12)。これらの行事に、嶺岡牧に関わる「祭り」を楽しむことができる。

また、現在に生きている嶺岡牧文化として チッコカタメターノ食がある(図 13)。地域 の伝統食を楽しみながら、嶺岡牧文化に触れ ることができる。



図 9 牧士であった石井家に伝わる鞍



図 10 高さが 2 mを越える路傍の馬頭観音



図 11 日本酪農発祥之地を象徴する代の牛洗行事



図 12 吉保八幡神社で行われている流鏑馬



図 13 安房地域の食であるチッコカタメターノ

5.「国民の寿命を延ばす」に始まった日本食 生活近代化遺産: 嶺岡牧

嶺岡牧は、八代将軍徳川吉宗が最高の薬餌といわれていた白牛の乳で作った「醍醐」を国民に広め、人々の寿命を延ばすため白牛を放ち酪農を始め「日本酪農発祥之地」となった。このことが起点となって、嶺岡牧は地域畜産会社の誕生地、主要製乳業の起業地と、嶺岡地域は牛乳・乳製品食の源流となった。こうした安房酪農・製乳業の史跡は、嶺岡地域に稠密に分布している(図 14)。

21 世紀に入り社会開発の起点が産業開発起点から暮らしづくり開発に移ったことから,

「人々の元気」をつくる複合的日本食生活近代化遺産である嶺岡牧及びそれと関連した嶺岡地域の歴史遺産は、安房地域再生にとりまたとない地域個性といえる。これらの歴史遺産を散策し、現地に立って将来の暮らしづくりに思いをめぐらすことができる。

#### Ⅲ. 嶺岡牧の魅力を総合的に活かす

嶺岡牧は、多面的な魅力に溢れている。しかし、この巨大資源の価値が認識されず、未だに未利用資源にとどまっている。これを、暮らしづくりの糧として、総合的・立体的に利用していくことが、今日的課題といえる。

嶺岡牧が持つ魅力である,1) 懐かしくて美しい景観,2)全貌が望める唯一の江戸幕府直轄牧,3) 多くの記録・民具が残る,4) 嶺岡牧文化を楽しむ,5) 「国民の寿命を延ばす」に始まった日本食生活近代化遺産,を活かし創造型・利用型再生を進めることが嶺岡牧再生の基本となる。

# 【文献】

- 日暮晃一(2012)千葉県鴨川市 嶺岡牧―嶺岡牧再生計画にかかわる基礎調査報告書,鴨川市・NPO 法人エコロジー・アーキスケープ,22p.
- 日暮晃一・千葉いずみ(2013)徳川吉宗再興の江戸 幕府直轄牧 嶺岡牧、千葉県酪農のさと・嶺岡牧 研究所,14p.
- 日暮晃一・牛村展子・小笠原永隆・千葉いずみ(2015) 「日本酪農之発祥地」における製乳事業創業期の 酪農・製乳実態に関するフードシステム考古学的ア プローチ,平成25年度乳の社会文化学術研究・研 究報告書,乳の社会文化ネットワーク,pp.1-30.
- 金木精一編(1961)安房酪農百年史,安房郡畜産農業協同組合,426p.
- 大谷貞夫(1993)安房国峯岡牧の再興をめぐって,野 中徹先生還暦記念論集.
- 渡辺誠(1969)第3章江戸時代の乳製品 第4章明治 時代の乳製品,野村泰三編著,日本乳製品小史, 有隣堂出版,pp.49-153.

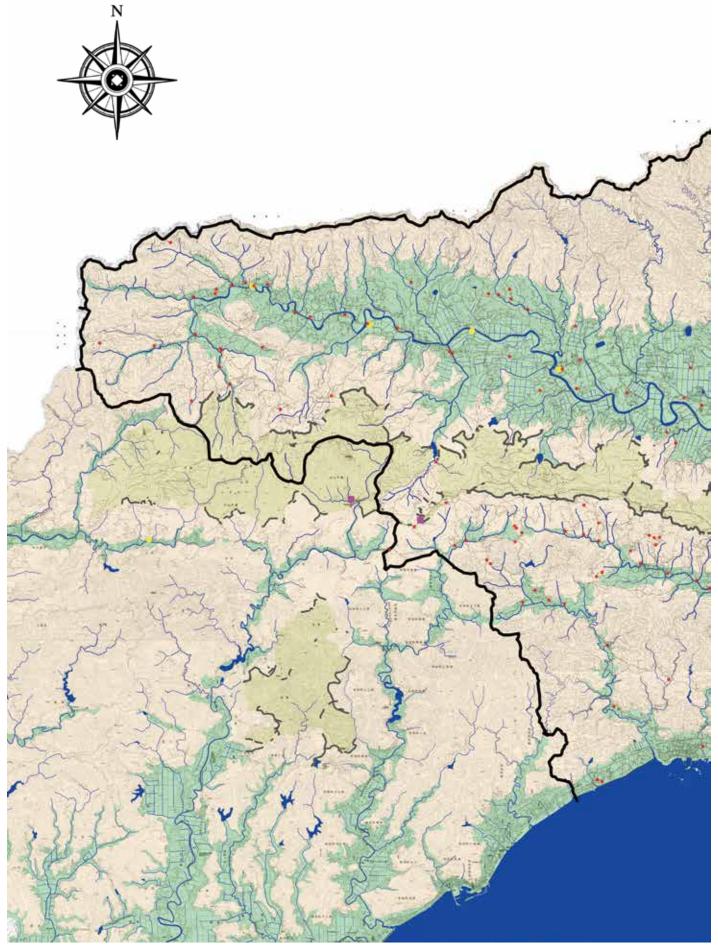
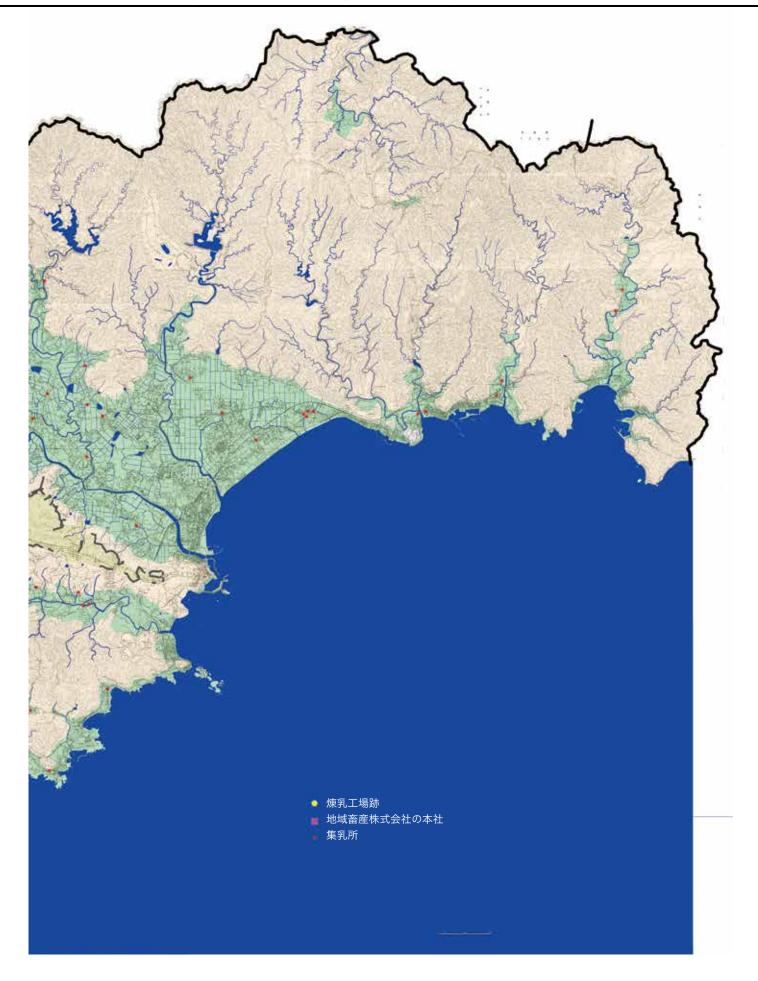


図 14 酪農・製乳業史関連遺産の分布



# 乳酪の郷を訪ねる

# 佐藤 奨平

# 日本大学生物資源科学部

#### I. はじめに

嶺岡牧が「日本酪農発祥之地」として千葉 県指定史跡に登録されたのは 1963 年のこと である。その2年前には、指定史跡登録の前 段としての意義を有する金木精一編(1961) 『安房酪農百年史』が発行されている。いず れの取り組みも, 当時の嶺岡地域の大きな内 発的エネルギーの発露によるものである。と りわけ、全426ページにおよぶ『安房酪農百 年史』は、9年もの歳月を費やして執筆され た労作であり, 地元出身で当時の大蔵大臣で ある水田三喜男が,題字と序文を寄せている。 水田は序文で,「日本農業の転換が叫ばれ,酪 農問題が新しい時代の脚光を浴びる様になつ たこの時, 日本酪農の発祥地をもつて自負す る安房の人達に本書がおくられますことは極 めて意義深いものであると信じます」と記し ている。折しも 1961 年とは、「農業界の憲法」 と称された農業基本法が制定された画期的な 年であり、感慨深いものがある。

序文は,水田に続いて,柴田等千葉県知事,安田善一郎農林省畜産局長,梅津武夫(社)日本ホルスタイン登録協会会長,山本兵三郎全国酪農業協同組合連合会会長,金木精一安房郡畜産農業協同組合会長の順でそれぞれ述べられている。同時に,書の後ろのページ(pp.420-422)を開くと,そこには「安房酪農百年史賛助員」の機関・個人がずらりと並んでいる(括弧[]内はその数)。順にみていくと,国[1],県[1],衆議院議員[2],県議会議長[1],県中央図書館長[1],元衆議院議員[1],酪農等全国組織[3],大手乳業メーカー[3],他県

個人[46],県内連合会等組織[5],市長・町長[13],銀行[3],鉄工・製作所[3],農協[33],地元関係者[9]が賛助員として挙げられている。これらの[128]の機関・個人,またはそれ以上の関係者が,当時のこの一大プロジェクトに賛同し,共鳴したのである。

あれから半世紀を経て、現段階に入って、 当時とも似た内発的エネルギーが感じられる ようになった。振り返れば、嶺岡牧とその地 域では、これまでに約10年の歳月を費やし、 一度たりとも中断することなく、地域再生の 取り組みが推進されてきている。

本報告では、「乳酪の郷」である嶺岡牧とその地域を訪ね、日本食生活近代化遺産への道程を明らかにすることを目的とする。IIで嶺岡牧のイノベーション発生機構を検討したのち、IIIでマネジメント実証成果を踏まえて「嶺岡牧再生による社会再生構想・仮」を例示し、IVでは結論と今後の課題を明らかにする。

# Ⅱ.嶺岡牧のイノベーション

10年前の2007年3月に、鴨川市は「鴨川市観光振興基本計画ー鴨川ホリスティックツーリズムー」を策定している。鴨川市では、大量生産・大量消費型のマスツーリズムを踏まえて、サステイナブルな「オルタナティブツーリズム」を実現するために、房総の多様な地域資源を見直し、活用することを推進してきた。しかも、この計画の内容については、単に観光計画というよりは、「暮らしづくり」を目的化していることが重要である。計画には、次の通り記されている。

「市民はホリスティックツーリズムにかか

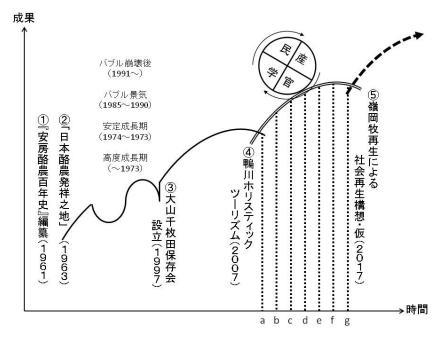


図 1 嶺岡牧のイノベーション概念図(非連続 S 字カーブ) 資料: 筆者作成

わることで、鴨川市の魅力を再発見し、また鴨川市らしい魅力的な暮らしを築くきっかけを作ることとなります。鴨川市を訪れるツーリストには、鴨川市をゆったりと味わい、多様な暮らしの体験をすることで、ツーリストの日常的な暮らしに新たな糧となる多様な体験と出会いの時間と空間が提供されます。ツーリズム体験により、第二のふるさととして鴨川が愛されるようになります」(鴨川市2007、p.9)。

この計画でも明らかなように,すでに 10 年前に,「オルタナティブ」への志向をみることができる。同時に,基本理念として,

- 1 じっくり本物に迫る
- 2 歴史をみつめ明日を切り開く
- 3 暮らしに楽しみ暮らしをつくる
- 4 自然や地域の個性を守り・育てる

以上の4点が挙げられている。ここでも,「暮らし」が掲げられている。すなわち,「鴨川ホリスティックツーリズム」は,「暮らしづくり」を志向してきたオルタナティブツーリズムであった。しかも,基本理念からは,〈本

物志向〉・〈歴史志向〉・〈生活志向〉・〈保 守志向〉といった鍵概念をみることができる。

佐藤(2017)で報告したように、この取り組みの中心的な拠点は、鴨川市大山地区であった。全国の中山間地域と同様に、高齢化、過疎化、耕作放棄地の増加などが、地域社会に惹起していた。大山地区では、これらの問題の解消を目指しながら、20年前の1997年に住民77名で大山千枚田保存会を設立し、棚田を核とする都市農村交流の取り組みを推進してきた。

このように、ここ 20 年間をみていくと、10 年のスパンで、内発的エネルギーが活発化していることが確認できる。 すなわち、図 1 のような非連続なS 字カーブ1 ~1 を描くことができるのである。

- ①『安房酪農百年史』編纂(1961年)
- ②「日本酪農発祥之地」(1963年)
- ③大山千枚田保存会設立(1997年)
- ④鴨川ホリスティックツーリズム (2007 年)
- ⑤嶺岡牧再生による地域再生構想・仮(2017年)①・②は、1955年からの高度成長期と重なり、

その後の 1974 年からの安定成長期, 1985 年



図2 嶺岡畜産株式会社の設立 (1889年) 資料:千葉県酪農のさと資料館より提供

からのバブル景気, そして 1991 年のバブル 景気崩壊といった経済環境は, 日本社会全体 にさまざまな変化をもたらした。「暮らし」 もまた、時代の変遷とともに激しく変化して きた。まさに、その激しい変化を振り返り、 あるいは批判・反省することにより,1997年 には③, 2007 年には④がそれぞれ実現してい る。以後,現在に至るまで,④と並行的に推 進されてきたのが、「新たな公(公共)」に 基づく複合的なプロジェクトである。2017年 に差し掛かり、これまでのプロジェクトを振 り返ると, a. 嶺岡牧基礎調査, b. 地域食生活調 查, c.馬城研, d.嶺岡白牛酪研究会, e.嶺岡牧 再生アカデミー, f.嶺岡牧再生プラットフォ ーム, g.牧の文化プラットフォームなどの嶺 岡牧をめぐる諸活動による豊富なナレッジ蓄 積が行われてきた。嶺岡地域を中心とする内 発的エネルギーは,このナレッジ蓄積を基礎 として, 「嶺岡牧再生による地域再生構想・ 仮」のもとで、さらなるイノベーションを興 そうとしているのである。

續岡牧のイノベーションについての最大の特徴は、「地域住民の強い結束」に依拠していることである。かつて嶺岡地域の住民が結束し、嶺岡牧に大規模な地域畜産会社「嶺岡畜産株式会社」を設立したユニークな史実が、そのことを物語っている(図 2 )。

#### Ⅲ.嶺岡牧再生による地域再生構想・仮

嶺岡牧のイノベーション発生機構を検討するなかで,地域住民の強い結束が,嶺岡地域

におけるイノベーションの成立条件であることが示唆された。地域の新たなイノベーションの実現に向けては、地域住民の強い結束が必要である。そのためのマネジメント手法は、「新たな公」と呼ばれる。多様な主体が協働し、大きな目的に向かって進んでいくための方法論であり、各地のまちづくり等で採用されている(たとえば、佐藤編著 2011)。ここ10年間の嶺岡牧をめぐる諸活動は、いずれも、「新たな公」に基づいて推進されてきた取り組みである。

以下では,「新たな公」に基づく「嶺岡牧 再生による地域再生構想・仮」(以下,構想 と略称)を例示してみたい。

#### 1. 目的の明確化

マネジメントを推進する際には, まず目的 を明確化することが重要である(たとえば, P.F.ドラッカー2006)。明確な目的地が設定 されていなければ、船がどこに針路をとれば よいかが分からず, 広い海をただただ彷徨い 続けるほかあるまい。しっかりとしたコンパ スをたずさえ,ひたすらに、目的地を目指し て進行することが重要である。しかしながら, 幸運なことに、われわれには図1でみた①~ ④ならびに a~g のナレッジ蓄積がある。し たがって,船をどのように操縦すればよいか, クルーがお互いに信頼し合い, 各自がどのよ うな役割を担っているかといったことが、す でに船内では共有されている。嶺岡牧のイノ ベーションのプロセスは、こうした取り組み の証左である。そこで、「構想」に際しても、 まずは目的を明確化することが不可欠である。 それは、「ビジョン」といっても差し支えな い。すなわち、現段階において、われわれの 描くビジョンとはどのようなものであるか。 日暮晃一(元東京大学大学院教授,農学博士) らとともに,これまで嶺岡牧再生へ向けて前 進してきた嶺岡牧研究所の牛村(2017)は, すでに,次の通り嶺岡牧再生マネジメント方

式の意義と課題を,具体的に報告している。 要約すると,以下の通りである。

#### (1) 理念·課題

- ○歴史遺産を社会で取り扱う方法に関する理念は、保護 (protection) →保存 (preservation) ・保全 (conservation)
  →再生 (restoration) といったように、時代とともに変化してきた。
- ○地域の社会的エントロピーの増大、耕作 放棄地・放棄林の広がりによる鳥獣被害 の増大、歴史遺産の破損・倒壊等の地域 文化の崩壊などの社会問題を Normal accident と位置付ける。
- ○①地域の魅力を知る地域教育の推進,② 地域のグランドデザインの提示,③新た な公による自律的地域再生マネジメント の推進が今日的課題である。

#### (2) マネジメントシステム

- ○Cultural Nature Steward を整備することにより、日々の暮らしのなかで実践できる嶺岡牧の日常的管理主体を形成
- ○地域の暮らしづくりを住民の手に取り戻すために、嶺岡牧調査、資源化整備、普及活動等のマネジメント全体を住民が中心になり推進している。住民の意見をボトムアップする嶺岡牧再生マネジメントシステムの構築を目指している。
- ○そのプロジェクトをマネジメントする際には、地方の現実に適合した①小予算、 ②少人数、③日常生活のなかでの管理によることが重要である。

#### (3) 教育システム

○現地に立って, 肌で嶺岡牧を捉え, 現地で将来を考える「アクティブラーニング」を実施する。その際には, 専門的知識のみならず, 地域での暮らしと嶺岡牧とのかかわり等の経験を通して嶺岡牧を案内



図3 **多様な再現利用型再生** 資料:筆者撮影(以下,同様)

する Cultural Nature Steward が不可欠 となる。

- ○嶺岡酪づくり、嶺岡スイーツづくり、チッコカタメターノ料理づくり(たとえば、日暮 2017b を参照)等を体験し、日本食生活近代化遺産である嶺岡牧の特徴を学習する機会を、現地学習との一貫型として設定する。
- ○その他,座学形式の講座・講演・シンポジウムや出前講座等の開催といった生涯教育を中心として,嶺岡牧が示す日本食生活近代化遺産という個性を理解できる複合的な教育・普及を図っている。

#### (4) 将来構想

- ○嶺岡牧を復元し、嶺岡牧として利用する 再現型嶺岡牧再生を核として、家畜糞尿 バイオマスによるエネルギー自給、健康 を増進する牛乳食の伝承・開発、地域畜 産会社での新管理型放牧型酪農の確立、 乳製品店・乳食飲食店モール設置による 牛乳食の拠点形成等による暮らし・産業・ 地域経済の再生を図る。
- ○そのためには、「遺跡公園」等の硬直的保存の形態を採用せず、嶺岡牧の特徴を踏まえての「再現利用型再生」を図ることが重要である(図3)。これによって、高い教育効果が期待されるとともに、経済性を含む暮らし開発が可能である。

#### (5) 意義と今後の課題

- 嶺岡牧再生マネジメント方式は,歴史遺 産再生にとって新たな地平を開く方式
- ○課題は,主として3点(牛村2017, p.30)
  - 「1) 新たな公と地域コミュニティとが分 断しており住民組織に昇華していない」
  - 「2) 歴史学習自体と、嶺岡牧の保存や地域づくりにニーズがある者とに分かれ、教育が嶺岡牧再生活動の力となっていない」
  - 「3)利用型再現方法の理論開発がされていない」
- ○これらの課題への対応としては、嶺岡牧 再生マネジメントを通して、研究開発を 進めることである。

#### 2. 目的実現に向けての組織化

以上で,これまでの現場での具体的な諸活動(理念・課題,マネジメントシステム,教育システム)ならびに,将来構想,意義・今後の課題が提示された。

目的設定の次に必要なことは、目的達成に向けての人材・資源・手段の組織化である。 そこで「新たな公」の出番である。しかしながら、上述の通り、今後の課題として、新たな公と地域コミュニティとの分断を、どの公と地域コミュニティとの分になった。 住民も、農家・企業も、研究者も、いる・ 住民も、地域コミュニティとのよりよい。 住民も、地域コミュニティとのよりよい。 は、大きュニンが体を 構築していくためには、大きはジョコンが、現り、それに向かうコニケーションが、現りである。その契機となり得るのが、現段階では、「日本遺産」化であると考えらい

#### 3. 目的化としての「日本遺産」化

現段階の事情として無視できないのが、「日本遺産」申請への可能性についてである。 2017年2月5日には、千葉県酒々井町(しすいまち)でフォーラム「房総の牧を考える」が開催された。すでに、2016年4月には、佐 倉市,成田市,香取市,銚子市を舞台としたストーリー「北総四都市江戸紀行・江戸を感じる北総の町並み」が日本遺産として認定を受けた。それに続けて,千葉県内では,31の市町村と県教育委員会が「房総の『海の幸』の文化一漁・食・祭と世界一の貝塚群ー」を申請している。房総の牧,すなわち,嶺岡牧については,千葉県内発の日本遺産申請の「第3の矢」となることが期待されている。

日本遺産とは何か。文化庁によれば,次の 通りとしている。

「地域の歴史的魅力や特色を通じて我が国の文化・伝統を語るストーリーを『日本遺産 (Japan Heritage)』として文化庁が認定するものです。ストーリーを語る上で欠かせない魅力溢れる有形や無形の様々な文化財群を,地域が主体となって総合的に整備・活用し,国内だけでなく海外へも戦略的に発信していくことにより,地域の活性化を図ることを目的としています」(文化庁ホームページ)。

この説明にしたがえば、嶺岡牧については、 申請への条件を、すでに満たしているのでは ないかと考えられる。この風を逃してはなら ない。船員が協力して帆を上げ、船を加速さ せなければ、いつまでたっても目的地へ辿り 着くことができない。

#### 4. 構想の例示

#### (0) 鍵概念の適用

先述したように、現地でのオルタナティブへの志向には、〈本物志向〉・〈歴史志向〉・〈生活志向〉・〈保守志向〉といった鍵概念がみられた。これらの鍵概念は、前述の「将来構想」とも合致する。

#### (1) 本物志向

「遺跡公園」等の硬直的保存は、本物とはかけ離れた世界である。そこに人びとの息づかいは感じられず、単にモニュメントとして置かれるだけである。人びとは成熟してきた。

社会的にも、経済的にも、知的にもである。 どこにでもあるものでは、人びとは満足しえ ない。より本物を志向する傾向がみられるよ うになってきた。再現利用型再生は、そのニ ーズに応えるものであると考えられる。

#### (2) 歴史志向

「日本遺産」の条件としてもみてきたように、歴史のストーリー性は不可欠である。嶺 岡牧は、日本の食生活を近代化に導いた歴史文化遺産である。『安房酪農百年史』にも、酪農家や乳業企業のダイナミックなビジネスヒストリーが描かれている。〈本物志向〉ではストリーが描かれている。〈本物志向〉では、人びとの息づかいが見て取れる。近年の嶺やおについての考古学的研究や古文書研究やは、世史的研究の成果もまた、嶺 岡牧のストーリー性の構築に寄与する。改めて申すまでもなく、歴史とは、人間の諸活動の所産である。

#### (3) 生活志向

嶺岡牧の最大の特徴は、「日本食生活近代化遺産」ということである。嶺岡地域の「日本酪農発祥之地」としての誇りは、江戸時代において、嶺岡白牛酪を製造し(徳川吉宗)、その後、国民に普及させた(徳川家斉)ことである。しかも、明治期以降、牛乳・乳製品の供給を通じて、日本国民の体位向上に貢献し、消費者の食生活を豊かにした役割を担ってきたことである。嶺岡牧は、日本国民の食生活・暮らしをつくってきた遺産なのである。

# (4) 保守志向

嶺岡牧再生による社会再生それ自体は、革 新的なことである。しかし、「自然や地域の個 性を守り・育てる」には、これまでの嶺岡地 域の歴史を尊重することが重要である。グロ ーバル化の進行は、地域社会に対しても、根 を下ろしている。生活様式は大きく変化し、 伝統的な酪農・乳業の姿は希薄化している。 「日本酪農発祥之地」としての、「日本食生活 近代化遺産」としての誇りを、「縦軸」の関係 から捉え直すことが、「日本遺産」としての意 義となってくる。Act Locally の時代である。

#### (5)日本食生活近代化遺産としての「日本遺産」

「地域が主体となって総合的に整備・活用し、 国内だけでなく海外へも戦略的に発信してい くことにより、地域の活性化を図ること」(文 化庁)が不可欠である。先ほど紹介した牛村 (2017)では、嶺岡牧の将来構想について若 干触れるに留まっており、以下では、その将 来構想を、より発展的に具体化してみる。

#### 1) 嶺岡牧の復元

嶺岡牧は、現在は山林であるが、かつては草地であった。多くの牛が放牧され、のどかな田園風景が広がっていたのである。まさにその姿を復活させる。

#### 2) 山林の整備

山林を草地に「戻す」際には、戦後植林した多くのスギやヒノキを伐採しなければならない。そこで、地元の森林組合等の活躍が期待される。地域の花粉症対策としても有効である。また、木質バイオマスの有効活用といて、岡山県真庭市で行われているような成板して、岡山県真庭市で行われているような成板して、関連し、嶺岡牧再生で必要となる建築物の構造材とする。また、大量の間伐材・樹皮・増満材とする。また、大量の間伐材・樹皮・端材等は、バイオマス発電所の燃料として「常的に供給できる。地域エネルギー自給が可能になり、新たな雇用創出も期待される。

#### 3) 放牧の推進

嶺岡牧が草地に戻ると、そこに牛を放牧する。明治期の嶺岡畜産株式会社では,1,000頭

ほどの乳牛を生産・所有し、農家がその飼養を分担していたとされる(日暮 2017a, p.1)。 千葉県酪農のさと資料館の隣には、千葉県嶺 岡乳牛研究所があり、乳牛改良や飼養管理改 善等の専門家が揃っている。

## 4) 畜糞尿バイオマスの利活用

乳牛を嶺岡牧に放牧したとすれば,多くの 糞尿が排出される。それ自体としては有機物 であるため、貴重なバイオマスとしてエネル ギー化することも可能である。「東北一の酪農 郷」といわれる岩手県葛巻町では、10,000頭 の乳牛が飼養され,毎日 400t の糞尿が発生 している。これを適正に管理するため、「くず まき高原牧場 | では、「畜産バイオガスプラン ト」の導入によって、メタンを主とするバイ オガスの製造を実現している。これにより, 発電のみならず、温水、肥料をつくることが 可能である。温室効果ガスであるメタンや悪 臭の発生を抑制し、良質な有機肥料を地域農 家へ還元するなど、食料・環境・エネルギー の循環型システムが構築されている。この分 野では,最も先進的な事例である。

#### 5) マイクロ小水力発電の設置

嶺岡牧の周辺には、いくつもの川が流れている。かつては、煉乳工場で使用する水の供給を担っていた。現在は、これをマイクロ小水力発電により、低落差での発電が可能である。木質バイオマス、畜産バイオマスによる発電と併せて複合的なリスク分散型による再生可能エネルギー自給が可能になれば、関連施設ならびに安房地域での利活用のみならず、海外への発信力にも寄与できる。

#### 6)健康増進に向けての牛乳食の伝承・開発

地域でのエネルギー自給を踏まえて、さまざまな事業が構想される。これまでの牛乳食の伝承・開発の実績を活かして、食生活・健康への貢献を目指す。「おいしく食べて健康へ

貢献する」ことがポイントである。その際には、多くの酪農・乳業の企業・団体、食科学系大学・研究機関との連携が期待される。乳の世界はきわめて国際的であり、国内のみならず、海外からの視察・来訪も実現する。

#### 7) 地域畜産会社による新管理型放牧型酪農

100年以上前に実現していた地域畜産会社による新管理型放牧型酪農を復活させる。畜産学は、当時よりもはるかに目覚ましい進歩を遂げており、従来の飼育・繁殖・改良、加工・利用、経営・経済についての研究をベースとしながら、最新の医学・薬学、獣医学、食品科学、環境科学、社会科学との積極的な交流が行われている。新管理型放牧型酪農の実現に向けての最新科学からのアプローチが期待される。同時に、そのなかでは、合理的なマネジメント方式の追求が模索される。

#### 8) 嶺岡モール設置による牛乳食の拠点形成

「嶺岡モール」を設置することにより,嶺 岡地域が誇る牛乳・乳製品・牛乳料理を一堂 に集約し販売・提供することができる。来訪 者を増やすことができれば,地域への経済波 及効果も期待される。嶺岡地域の木材を建築 材として活用したモールを設置することにより,地元森林組合・林業・建設業・設備企業 等に対しての効果のみならず,地域で牛乳・ 乳製品を生産する酪農家・協同組合,地元雇 用による従業員等に対して効果をもたらす。

#### 9) 交通等の再編・整備

集客を考えたとき、嶺岡地域への交通手段は限られてくる。東京駅から安房鴨川駅まで特急わかしおで2時間、アクアライン経由の高速バスでも2時間半かかる。さらに、安房鴨川駅から千葉県酪農のさとに行くには、バスで長狭中学校前にて下車してから徒歩で1

時間かかる。館山駅からだと,便数の少ないバスで細田にて下車してから徒歩 20 分かかる。地方や海外からの場合は東京国際空港(羽田空港) や成田国際空港を経由するが,空港からの直行バスはない。しかし,「日本遺産」化を契機に新たなイノベーションが興れば,来訪者の利便性を考慮して,交通等の再編・整備が必須である。同時に,嶺岡の地域性を生かして,駅から馬車を出して,情緒を感じながら,各種スポットに立ち寄れるようなルートも考案できる。

#### 10) 酪農・製乳業の跡のルート化

交通等の再編・整備により、新たにルート 化を考案する際には、安房地域の酪農・製乳 業の跡を活かさない手はない。江戸時代の嶺 岡白牛酪(醍醐)は「寿命を延ばす」、明治時 代の煉乳は「強い体をつくる」、大正~昭和前 期の粉ミルクは「乳児死亡をなくす」といっ たように、〈酪農~製乳工場~集乳所〉をめぐ るルートが考案できるはずである。 嶺岡牧を めぐるストーリーは、このようなルート化構 想によっても具体化される(図4)。

## Ⅳ. おわりに

最新の研究では、嶺岡牧については、軍馬生産の場ではなく、古代からの原動力生産基地、近世から近代にかけての酪農産業拠点であるとの見方が有力である(日暮 2017b)。すなわち、そうした性格を有する嶺岡牧については、「軍馬生産の遺産」としてではなく、「日本食生活近代化遺産」として見直されなければならないことを意味している。

嶺岡地域の内発的エネルギーは、嶺岡牧のイノベーションをもたらす。現段階では、「日本遺産」化に基づく社会再生が重要である。 そのためには、引き続き、住民組織化、教育による人材育成、利用型再生方法の理論開発を進めていかなければならない。

嶺岡牧再生による社会再生については,復



図4 〈酪農~製乳工場~集乳所〉をめぐるエクスカーションの例

元→放牧→バイオマス等による再生可能エネルギー利活用→牛乳食伝承・開発→地域畜産会社による新管理型放牧型酪農→嶺岡モール→交通整備・ルート化との構想内容を例示した。日本食生活近代化遺産の「日本遺産」化へ向けての「たたき台」となれば幸いである。

#### 文献

ドラッカー, P.F. (2006)『現代の経営』上, ダイヤモンド社 (初版 1954)

牛村展子(2017)「「嶺岡牧再生マネジメント実証」 方式」『酪農乳業史研究』第14号, pp.23-30

日暮晃一監修・執筆、プロジェクト鴨川味の方舟編(2017a)『大山の食べ物「捨てるのは勿体ないので」から「食べたい食材」に チッコカタメターノ料理』大山千枚田保存会

日暮晃一(2017b)「遺構が語る嶺岡牧の姿」『酪農 乳業史研究』第14号, pp.4-11

金木精一編(1961)『安房酪農百年史』安房郡畜産 農業協同組合

鴨川市(2007)『鴨川市観光振興基本計画-鴨川ホリスティックツーリズム-』

佐藤滋編著 (2011)『まちづくり市民事業 - 新しい 公共による地域再生 - 』学芸出版社

佐藤奨平(2017)「食の産業遺産の地域資源化による都市農村交流 - 鴨川市大山地区の取り組みから-」大日本農会『農業』第1623号, pp.47-53

ミニ特別展 石井家文書が語る嶺岡牧 1

# 嶺岡牧の牛馬を守る

一鉄炮の貸与による被害獣の駆除一



#### 1. 由緒書



寛政 11(1799)年 10 月 8 日 幕府に提出するため嶺岡牧の牧士の由緒を記した文 書。

# 2. 牧士役申付書



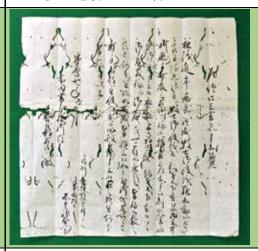
宝暦 6(1756)年 11 月 27 日 江戸幕府が牧士役を申し付けた書状。

# 3. 牧士役引退願い



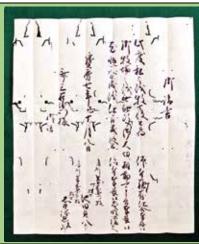
宝暦 7(1757)年 9月 幕府に病気で牧士役を勤め難いと引退を願い出た書 状。

4. 牧士退役の口上書



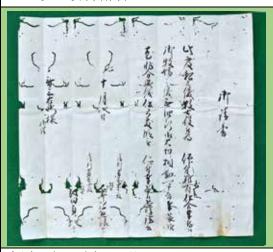
宝暦 7(1757)年 9月 石井孫左衛門牧士が病気を理由に退役を幕府に申 し出た書状。

5. 牧士任命御請書



宝暦 7(1757)年 10月 8日 江戸幕府による嶺岡牧の牧士任命に対する請書。

## 6. 牧士役御請書



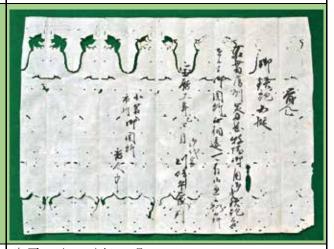
宝暦 7(1757)年 10月 8日 江戸幕府による嶺岡牧の牧士任命に対する請書。

# 7. 鉄炮房州峯岡牧御用差遣



宝暦 11(1761)年 4月 代官が関所に嶺岡牧御用の鉄炮が通ることを通達した文書。

# 8. 鉄炮5挺関所通行手形



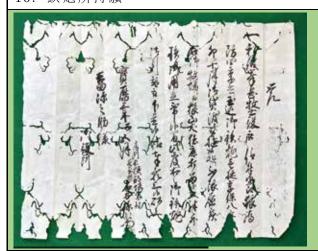
宝暦 11(1761)年 4月 嶺岡牧御用の鉄炮が関所を通るため代官が出した通 行手形。

9. 嶺岡牧御用鉄炮引替の先触れ



安永 3(1774)年 3月 代官が嶺岡牧掛り牧士に出した鉄炮引替の先触れ。

# 10. 鉄炮所持願



宝暦 3(1753)年 5月 牧士の石井孫左衛門が代官に出した鉄炮所持願い。

# 11. 奉願上侯鉄炮之事



宝暦 10(1760)年 12月 牧士鉄炮4挺の預かり・管理に関する書状。

# 12. 奉願上候御鉄炮之事



宝暦 10(1774)年 12月 牧士鉄炮4挺の預かり・管理に関する書状。

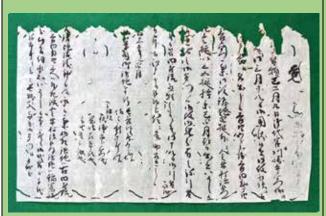
# 14. 鉄炮引替願い





宝暦 11(1761)年 2月 牧士の石井弥惣治が代官に出した鉄炮引替の願い。

# 15. 覚 鉄炮拝借引替に付



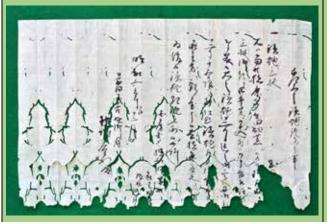
宝暦 11(1761)年 4月 御箪笥御鉄炮奉行長谷川庄五郎他4名に出した鉄 炮引替願い。

16. 鉄炮証文

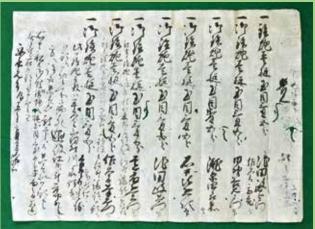


宝暦 11(1761)年 2月 牧士である石井,日野,吉田,吉野が代官に出した 鉄炮拝借引替の書状。

17. 鉄炮挺数・所持者お尋ね

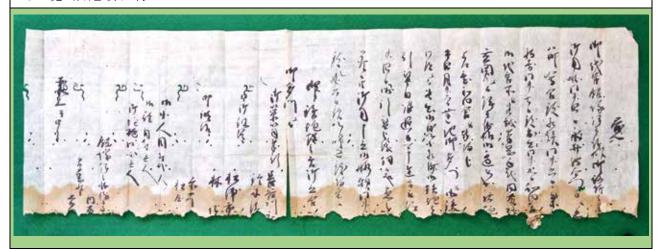


明和 5(1768)年 12月 前田又吉,神作戸右衛門宛に出した鉄炮3挺の証 文



安永元(1772)年 12月 牧士鉄炮を所持している8名の牧士名等を遠藤氏宛 に出している。

#### 18. 覚 鉄炮改に付



安永 3(1774)年 4月 代官からの鉄炮改について伝える書状。

#### 19. 鉄炮預りに付



天保 11(1840)年 6月 上三原村百姓代3名が牧士に宛てた鉄炮預かりについての書き付け。

#### 20. 鉄炮預人名前御尋ねに付



天保 11(1840)年 6月 上三原村百姓代3名が6名の牧士に宛てた鉄炮預かりについての書状